ヘブライ語で学ぶ創世記　Ⅰ
『ノアの箱舟』

千葉　糺

はじめに

私は現在「学生」になっています。自宅で通信講座を、また公開授業で講義を受けています。あれこれ講師の先生に質問したりして、学生気分を味わっています。これまで中途半端だった知識を少しは補充しておきたいと、ヘブライ語から学ぶ聖書学（当然、旧約聖書中心です）を受講しています。

それだけではなく、ユダヤ賢者の奥深い言葉も端々で学んでいます。本論に入る前に、ユダヤ的発想を一つ演習問題として紹介しておきます。

ユダヤ的発想演習

エリシャ・ベン・アブヤがこう言った。

幼いときに学ぶ者は何にたとえることができるか。真新しい紙（つまり真新しい羊皮紙）の上に書かれたインクあるいは羊皮紙にたとえることができる。

老いて学ぶ者は、何にたとえることができるか。消された紙（羊皮紙）の上に書かれたインクあるいは羊皮紙にたとえることができる。

（問）これは何を言おうとしているのか。

ユダヤ的発想から、この設問を次のように解説していきます。

「幼いときに学ぶ」ということは、真新しい羊皮紙あるいはそのインクのようなもので、一旦書くといつまでも消えることはない学びであると言えます。

一度使った羊皮紙は、折角書いても長持ちはしません。ユダヤ的発想に転換して見ると、年取ってから勉強するものは永年保たせる必要があるのかどうかと考えます。

若い人が勉強する内容は、その人がこれから長い年、生きていくための基礎の勉強で、それを基盤にして生きていくものです。つまり、長い年月というものを視野に入れた勉強のはずです。

一方、六十歳を越えて学ぶときに、例えば後三十年も保たせるような知識を学ぶのかということです。

ここでは、老いてから学ぶ人は、羊皮紙に何を書くかを気をつけなさいと言っているのです。残った人生をどれだけ有効に、有益に生きていけるかという観点から考えた場合に、このことは必要、このことは必要ないという判別が年取った人には出来るはずです。

ですからこの話は、「勉強は頭が柔らかい幼いときにしっかりしておきなさい」ということを言おうとしているのではなくて、年取ってから学ぶ人は、一番重要なことを学ぶようにしなさいと言っているのです。

自分は何を心してこれからの人生を生きていくのか、そのことだけを（羊皮紙に）書いて生きなさいと言っています。

ここまで考えるのを「ユダヤ的考え方」と言います。

ユダヤ的発想は必ず**「複眼」**です。一つの見方だけではなく、幾つもの見方を同時に見るというものの考え方です。

たったこの設問だけでも、奥が深いことがお分かりではないでしょうか。

とすれば、私がヘブライ語から聖書について学ぶということが、このユダヤ的考え方に反するのではないかと思いつつ、受講していることを「告白」しておきます。

戦後七十年になろうとしている今、私たちが立っている現状はどうでしょうか。現状は「惨状」という言葉で置き換えてもいいのではないでしょうか。

二〇〇一年九月十一日の大惨事のときは「バベルの塔」を思い出し、二〇一一年三月十一日の東日本大震災では「ノアの箱舟」を心に浮かべた人も多いのではないでしょうか。

しかし、この「バベルの塔」「ノアの箱舟」という二つの物語について正しく理解しているかとなると大いに疑問符が付くのではないでしょうか。

本紀要ではこの「ノアの箱舟」物語について、ヘブライ語からの解釈を詳しく述べていきたいと

思います。

「ノア」とはヘブライ語で元々、「休み」「休息」という意味です。聖書の中の名前は、ある意味で意図的にその人の性質・運命というようなものを表しています。「休み」「休息」という意味の名前がついているということから考えてノアは非常に、もの静か、穏やかな人であったろうと考えられます。

最近、映画で「ノア」が上映されていましたが、映画での「ノア」は「ノア」本来の意味とは大分、かけ離れた人物のような気がしました。

1　「ノアの箱舟」物語とは

「百聞は一見にしかず」―話題の作品ということで、映画館に足を運びました。「ノアの箱舟」物語は、ほとんど誰でもご存知の物語でしょうが、少し長くなりますが、旧約聖書「創世記」第六章後半部から第九章には、どういうことが書かれているかを紹介しておきます。

この地は神の前に堕落し、不法に満ちていた。
神は地を御覧になった。見よ、それは堕落し、すべて肉なる者はこの地で堕落の道を歩んでいた。
神はノアに言われた。「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。
あなたはゴフェルの木の箱舟を造りなさい。箱舟には小部屋を幾つも造り、内側にも外側にもタールを塗りなさい。
次のようにしてそれを造りなさい。箱舟の長さを三百アンマ、幅を五十アンマ、高さを三十アンマにし、箱舟に明かり取りを造り、上から一アンマにして、それを仕上げなさい。箱舟の側面には戸口を造りなさい。また、一階と二階と三階を造りなさい。
見よ、わたしは地上に洪水をもたらし、命の霊をもつ、すべて肉なるものを天の下から滅ぼす。地上のすべてのものは息絶える。
わたしはあなたと契約を立てる。あなたは妻子や嫁たちと共に箱舟に入りなさい。

また、すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。
それらは、雄と雌でなければならない。
それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。
更に、食べられる物はすべてあなたのところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。」
ノアは、すべて神が命じられたとおりに果たした。

から始まります。そして

洪水が地上に起こった。雨が四十日四十夜地上に降り続いたが、まさにこの日、ノアも、息子のセム、ハム、ヤフェト、ノアの妻、この三人の息子の嫁たちも、箱舟に入った。
主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた。
洪水は四十日間地上を覆った。水は次第に増して箱舟を押し上げ、箱舟は大地を離れて浮かんだ。
水は勢力を増し、地の上に大いにみなぎり、箱舟は水の面を漂った。
水はますます勢いを加えて地上にみなぎり、およそ天の下にある高い山はすべて覆われた。
地上で動いていた肉なるものはすべて、鳥も家畜も獣も地に群がり這うものも人も、ことごとく息絶えた。
乾いた地のすべてのもののうち、その鼻に命の息と霊のあるものはことごとく死んだ。
地の面にいた生き物はすべて、人をはじめ、家畜、這うもの、空の鳥に至るまでぬぐい去られた。彼らは大地からぬぐい去られ、ノアと、彼と共に箱舟にいたものだけが残った。
水は百五十日の間、地上で勢いを失わなかった。

と続きます。

神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた。
第七の月の十七日に箱舟はアララト山の上に止まった。
四十日たって、ノアは自分が造った箱舟の窓を開き、鳥を放した。鳥は飛び立ったが、地上の水が乾くのを待って、出たり

入ったりした。
ノアは鳩を彼のもとから放して、地の面から水がひいたかどうかを確かめようとした。
しかし、鳩は止まる所が見つからなかったので、箱舟のノアのもとに帰って来た。水がまだ全地の面を覆っていたからである。ノアは手を差し伸べて鳩を捕らえ、箱舟の自分のもとに戻した。
更に七日待って、彼は再び鳩を箱舟から放した。
鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上からひいたことを知った。
彼は更に七日待って、鳩を放した。鳩はもはやノアのもとに帰って来なかった。
ノアが六百一歳のとき、最初の月の一日に、地上の水は乾いた。ノアは箱舟の覆いを取り外して眺めた。見よ、地の面は乾いていた。
第二の月の二十七日になると、地はすっかり乾いた。
神はノアに仰せになった。
「さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。
すべて肉なるもののうちからあなたのもとに来たすべての動物、鳥も家畜も地を這うものも一緒に連れ出し、地に群がり、地上で子を産み、増えるようにしなさい。」
そこで、ノアは息子や妻や嫁と共に外へ出た。
獣、這うもの、鳥、地に群がるもの、それぞれすべて箱舟から出た。
ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。
主はめの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。
地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも／寒さも暑さも、夏も冬も／昼も夜も、やむことはない。」

最後は

神はノアと彼の息子たちを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちよ。わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」で終わるという物語です。

2　映画『ノア―約束の舟』

映画『ノア―約束の舟』のパンフレットには次のように書かれています。

ある夜、ノアは眠りの中で、恐るべき光景を見る。それは、堕落した人間を滅ぼすために、すべてを地上から消し去り、新たな世界を創るという神の宣告だった。大洪水が来ると知ったノアは、妻ナーマと三人の息子、そして養女イラと共に、罪のない動物たちを守る箱舟を作り始める。やがてノアの父を殺した宿敵トバル・カインがノアの計画を知り、舟を奪おうとする。壮絶な戦いのなか、遂に大洪水が始まる。空は暗転し激しい豪雨が大地に降り注ぎ、地上の水門が開き水柱が立ち上がる。濁流が地上を覆う中、ノアの家族と動物たちを乗せた箱舟だけが流されていく。閉ざされた箱舟の中で、ノアは神に託された驚くべき使命を打ち明ける。箱舟に乗ったノアの家族の未来とは？　人類が犯した罪とは？　そして世界を新たに創造するという途方もない約束の結末とは――？

監督ダーレン・アロノフスキーは、旧約聖書の他に「死海文書」「エノク書」等々のものを史料としたと書いています。映画では旧約聖書には書かれていないことも盛り込まれていますが、そこをとやかく言う必要はないと思います。あんな大きな舟を一人で造れるはずがない、という疑問もこの物語の趣旨から外れます。私はこの物語の作者が「言おうとしていることは何か」という、本質的なことに絞って論じてみたいと思います。旧約聖書というのは、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教という三つの宗教の正典ですが、この「洪水物語」が起きた場所は

どこでしょうか？

カナンと呼ばれたユダヤ地方・現イスラエルの出来事だったでしょうか？

勿論、違います。

ユダヤにはヨルダン川という小さな川しかなく、この川は氾濫するような大きな川ではありません。

広く知られているように、この物語は元来、メソポタミア地方（現イラク）の南部シュメル地方の現ペルシア湾付近で起きた洪水物語が、旧約聖書に伝承されたものです。

ちなみに、「メソポタミア」というのは、ティグリス・ユーフラテス両大河に挟まれた地域を言います。「メソ」は「中間」、「ポタミア」は「河（ポタモス）の」というギリシア語で、古代ギリシア人が呼んだことが起源になります。

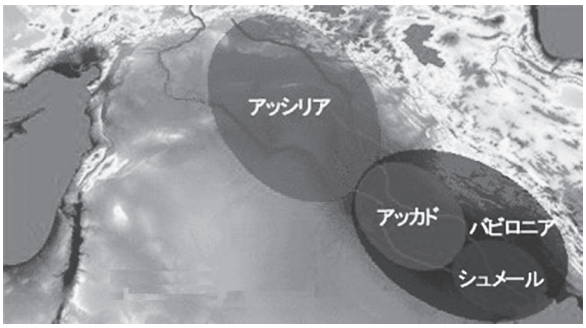
「洪水物語」はよく知られているシュメル神話の中の『ギルガメッシュ叙事詩』にも書かれています。ここで少し、『ギルガメッシュ叙事詩』について述べておきます。

「創世記」は紀元前九五〇～八五〇年の間に書かれたとされていますが、そのはるか前、紀元前二〇〇〇年紀前半にシュメル語で書かれた次のような文書が発見されています。

（今は）異なる言葉（を話す）国、スビルとハマジ、高貴なメを持つ大いなる国シュメル、優れた国ウリ（＝アッカド）、豊かな草に安らぐ国マルトゥ、（これら）全世界で、（かつては）仲良き人々はエンリル神に一つの言葉で語りかけた。

「一つの言葉」―何かと似ています。そう、これは「バベルの塔」物語の原型と言われている『エンメルカルとアラッタの君主』という文学作品の一節です（文中の「メ」というのは「世界秩序の根源」という意味です）。

前掲の地図中、アッシリアとは「アッシュルの土地」を意味し、バビロニアは「バビロンの土地」を意味するギリシア語です。バビロニアの北部をアッカド、南部をシュメルと呼びました。古代オリエント文明の中の一つです。



メソポタミア

ヨルダン川

この〝オリエント〟について三笠宮崇仁親王はこう書いています。

現代ヨーロッパ語の“Orient”は、ラテン語の“orior”に由来します。このことばは、「昇る」とか「立上がる」意味の動詞で、それから“oriens”（オリエーンス）という名詞ができました。そして、「昇る太陽」から、その方向、すなわち「東方」を表わすようになりました。これに対して、「沈む太陽」または「西方」を意味する言葉は“occidens”（オッキデーンス）で、英語の“Occident”（オクシデント）はそれから派生したわけです。いずれも、ラテン語を日常用いていたローマ人が、その居住地であった今日いうイタリア半島を起点として方角を示すために使用したものでありました。

シュメル人は古代メソポタミア文明の最古の段階である紀元前四千年紀（前四〇〇〇～三〇〇一年）後半に登場した民族系統不詳の人々です。現イラク共和国のペルシア湾付近にあたります。

ここは**葦**と**泥んこ**が豊富な地域で、葦は割いて莚（むしろ）に編み、泥んこは固めて乾かして煉瓦を作って、小さな住宅から倉庫や城壁、果ては神殿付属の巨大な聖塔「ジクラト」まで建造しました。これがカナンに伝わって、『旧約聖書』ではこうなっています。

主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。
（「創世記」第二章七節）

「バベルの塔」物語で、レンガやアスファルトが出てくるのもメソポタミア文明の伝承の一つです。

ギルガメッシュというのは、古代オリエント世界最大の英雄で、広い地域でその物語は知られ、慕われていたと言われています。『ギルガメッシュ叙事詩』とは、近代の学者がつけた書名で、中にはいろいろの物語が書かれています。その中でも有名なものが「洪水物語」です。「洪水物語」にはいくつかのバージョンがありますが、『ギルガメッシュ叙事詩』にある「洪水物語」は、要約すると次のような内容です。

イラク湿原

地上に人間の数が増し、神々は人間の騒々しさに悩まされて眠れなくなります。
神々が洪水を送って人間を滅ぼそうとしたとき、知恵の神エアはウトナピュシュテムに箱舟を造るように命じます。ウトナピュシュテムは自分で造った箱舟に家族と親族、舟を操舵する人、あらゆる種類の生物、金銀などの財産を舟に積み込み、洪水を逃れます。それを知った神々の第一人者エンリルは激怒しますが、最後はウトナピュシュテムを次のような言葉で祝福します。
「これまで、ウトナピュシュテムは人間であったが、いまや、ウトナピュシュテムと彼の妻は、われわれ神々のようになる」。
こうしてウトナピュシュテムと妻は神々のような不死の生命を与えられ、神々と同等の存在になります。

ここに登場するウトナピュシュテムはノアに該当する主人公です。
よく似ていることがお分かりだと思います（ただし、洪水を起こす原因は、旧約聖書では「人間の堕落」ですが、シュメル版では「神々の安眠が人間の騒がしさで妨げられたから」となっています）。

似ていますが、全く違ういくつかのことに私たちは注目すべきなのです。
旧約聖書では何を言いたかったのか。
映画ではその焦点がはっきりしていなかったと思います。シュメル版「洪水物語」と比較していなかったのではないでしょうか。旧約聖書をシュメル版「洪水物語」の焼き直し程度に考えていたのではないでしょうか。
ですから「言いたいことは何か」という焦点がぼやけた作品になってしまったと思います。
キリスト教的見地からの解釈ではぼやけてしまうのです。旧約聖書ではこれに続くのが「バベルの塔」の物語ですが、これもキリスト教的見地からの解釈ではよく分かりません。
ラッセル・クロウ等、一流の俳優をそろえ、時間と経費をかけた結果が非常に惜しまれます。

3　二つの洪水物語

（一）違い・その1

シュメル版「洪水物語」と、ノアの「洪水物語」の重要な違いは何でしょうか？

ノアが上陸した後、どうなったかご存知でしょうか。

「創世記」にはこう書かれています（九章二十一節～二十五節）。

あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になっていた。
カナンの父ハムは、自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。セムとヤフェトは着物を取って自分たちの肩に掛け、後ろ向きに歩いて行き、父の裸を覆った。二人は顔を背けたままで、父の裸を見なかった。ノアは酔いからさめると、末の息子がしたことを知り、こう言った。「カナンは呪われよ。奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」

要するに、ノアは上陸後、農夫になって葡萄酒を飲み過ぎて、ひっくり返って素っ裸でいたところを息子たちに見られたと書いてあります。息子の一人・ハムは、父親の裸姿を見たことから、理不尽にも呪われてしまいます。

ここでは、どんな凄い奇跡を体験しても、それによってその人が「偉くなる」ということはないということを言っています。

一方、メソポタミア伝承では、奇跡を体験した人間がより高い位になるという考え方です。『ギルガメッシュ叙事詩』ではこの洪水物語を通過した人間・ウトナピュシュテムは、神に近い人間になり、不死を与えられたりしています。

ここが根本的に違う一つです。

言わんとしている本質が全然違います。「同じモチーフを使っているから真似」ではなく、本質が違っているから「真似ではない」のです。

逆に言うならば、聖書でのノアの箱舟物語は、メソポタミア物語に対する**強烈な批判文学**です。

洪水を経てノアがどういう職業についたかというと、農夫、農業に従事する者になったということです。額に汗をして働く人間になったということが書いてあります。預言者になったとは書いていません。神の人として、皆に崇められたとも書いていません。かえって葡萄酒を飲み過ぎて、ひっくり返って素っ裸でいたという恥ずかしいことをしたということは書いています。

これは現代においても非常に痛烈な批判ではないでしょうか。

奇跡を体験しても人間は人間であるということです。一歩間違えば酔っ払い、つまり人間は変わっていないということです。

神が奇跡を起こしたのであって、人間がそれをしたのではないのだということを、聖書文学はきちんと押さえています。どんなに奇跡を体験しても、人間が偉くなるということはない、ということです。

そこを押さえないと、この映画がエンターテイメントに力点を置いているのか、旧約聖書を描こうとしたのか、言いたいことが鑑賞者には中途半端にしか見えないということです。

(二) 違い・その2

一つだけ重要なこととして述べましたが、「では、他にはどんな違いがある?」と思われた方にあと一つ。

それは**舟の扉を閉めたのは誰か**ということです。

上記の「創世記」にもう一度目を通してみます。

「主は、ノアの後ろで戸を閉ざされた」とあります。神が自ら舟の扉を閉め、人々を乗せなかったのです。

ノアが閉めたのではなく、神が扉を閉めたのです。

映画では下図右のような光景が映し出されます。

洪水が起き、人々が逃げ惑い、ノアの家族以外は滅ぼされます。

もう一つ洪水の光景を描いたものをあげてみます(下図左)。これは『ウィーン創世記』にあるもので、六世紀の作品です。稚拙とは言えリアルさが強く迫ってきます。

4 ヘブライ語から学ぶ「ノアの箱舟」のいくつかのこと

(一) ノアとアブラハム、どちらが義人か?

ノアが義人ならば、「アブラハムと比較したとき、ノアは義人だったのか、それほどでもなかったのか」という命題がユダヤ人には生まれてきます(こんなことまで考えるのです!)。

ラッシー[1](一〇四〇〜一一〇五年)は次のように注解しています。

[1] 南フランスで活躍したラビ。

賢者たちの中には、ノアを賞賛する者がいる。もし、ノアが義人の世代に生きていたら、彼は義人として際立っていただろうと。それとは逆に、彼の世代を批判的に見る者もいる。この世代だから、ノアは義人として認められたが、アブラハムの世代では特別な人間ではなかった。

もし、アブラハムの時代にノアがいたとしたら、ノアは全然際立っていないという意見と、どの世代に持っていっても彼は義人だ、という二つの意見がユダヤ社会にあったということです。

ユダヤ注釈は、必ずヘブライ語原文で読んでいますから右記の「彼の世代の中で」の「世代」が複数であるということに立脚して解釈していきます。翻訳で読んでいると、ここは何も気になりません。複数であるというポイントに目がいかないからです。キリスト教注解でもあまりここは問題にしないと思います。

ユダヤ注解では、このラッシーの言う「アブラハムの世代に連れて行ったならば、ノアは（それほど）義人ではない」という結論に至っています。

何故か？　あくまでも聖書に基づきます。ノアとアブラハムについて書かれている箇所を取り上げて比較してみます。

創世記六章九節

ノアは、正しい人であって、その時代にあっても、全き人であった。

ノアは神とともに歩んだ。

創世記十七章一節

私は全能の神である。あなた（アブラハム）は私の前を歩み、全き者であれ。

ポイントは二つ。両方に共通している「全き人」「全き者」という箇所と、ノアについては「ノアは神とともに歩んだ」、アブラハムについては「アブラハムよ、あなたは神の前を歩め」となっている点です。

この二つがポイントです。

先ほど「ノアはすべての世代においても彼は義人だ」と取った人はどう理解したかというと、「神とと

וְנֹחַ	מָצָא	חֵן	בְּעֵינֵי	יְהוָה׃
そしてノアは	見出した	恵を	～の目に	主

נֹחַ	אִישׁ	צַדִּיק	תָּמִים	הָיָה	בְּדֹרֹתָיו
ノアは	人	義しい	完全な	～であった	彼の世代の中で

ヘブライ語の一部

もに歩んだ」人がノアだというのが一つと、「その時代においても全き人であった」と書いてあるということからです。

それに対してアブラハムは、「あなたは全き者であれ」と命令されている。命令されているということは、まだそうなっていない可能性がある。

ノアの方がより義人だと見た人は、アブラハムは「共に歩む」のではなく、「前を歩め」となっている、だからノアの方がすでに「全き人」とあり、「共に歩む」のであるから上ではないかと見たわけです。

それに対してそうではないと見た人はどこに着眼したのか。

アブラハムは「アブラハムよ、あなたは私（神）の前を歩め」となっています。「神の前を歩く」というのはどういうことか。「共に歩む」のならば、いろいろと対話をしながらとか、指示を聞きながら歩きます。

「前を歩く」ということは、神の一歩先を行くということです。どっちがほんとうの義人である要素が必要か、とユダヤ賢者は考えました。

一緒に行くというよりは、一歩前に行くという方が難しいのでアブラハムの方が優れた賢者であるということを、ここから出してきました。

神様より一歩先を行くということの難しさを、アブラハムは命じられている。普通の人にはこういう命じ方をおそらくはしない。神様が、アブラハムの中に「この人には命令しても大丈夫だ」という何かを見いだしていないと、こういう命じ方はしないであろう、と考えたということです。

ここからユダヤ的理解としては、アブラハムの方がより義人だという考え方が主流になってきます。

アブラハム伝では十八章後半では、神様とアブラハムはネゴシエーションすらしています。単に対話ではありません。しかも自分（神）がしようとしていることを、アブラハムに秘密にしておいていいだろうか、ということが十八章後半には出てきます。[二]

アブラハム伝とノアの話を比較したとき、ノアという人は言葉を発していません。

二（18:17～18:19）主は言われた。「わたしが行おうとしていることをアブラハムに隠す必要があろうか。アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によって祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである。」

箱舟を造れといわれました。すべての動物を番（つがい）で入れろといわれましたから、小さいはずがありません。

「神様、とてもそれは無理です」と言いそうなものですが、何も言っていません。

アブラハム伝では、神様とアブラハムが対話をしたというところが出てきます。

そうすると、ノアは確かに神と共に歩んだが、対話がない。それに対してアブラハムは「神様、こうじゃないでしょうか」「あなたがソドムとゴモラを滅ぼすというけれども、もしここに何人か義人がいたらそれでもあなたは滅ぼすのですか」という具合に。最後十人まで頑張りますが、それ以上は頑張れなかったという話[三]が書いてあります。そういう部分がノアにはない。

勿論、逆のことも言うことが出来ます。箱舟を造れと言われて、一つも文句を言わずにやったというところにノアの凄さがあるのではないか。確かにそうです。見方次第です。

ノアの場合には何を言われても何も言わない。「はい、その通りいたします」とすら言っていません。

（二）動物に罪はあるのか？

私たちがこの「ノアの箱舟」物語を読んで、奇異に感じる部分があります。人間が地に満ちて暴虐が起きたことは分かるとして、家畜に何の罪があるのか？　人間がどこかで殺人を犯したからといって、そこらにいる動物に何か罪があるのか？

聖書は「土地」ということと「人間」ということをセットで語ってくる文学です。多くの人がそれを常識的に捉えることが出来ません。聖書文学というのは、必ず、土地と人間の心を切り離して語っては来ません。

人間の心が荒んだら「土地が汚れた」[四]と返ってきます。そういう立ち位置を聖書文学は持っています。

バビロニア・タルムードにこうあります。

三（18:23～18:32）アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」

四（ヘブライ語で、学習・研究の意）ユダヤ教でモーセの律法に対して、まだ成文化せず十数世紀にわたって口伝された習慣律をラビ達が集大成したもの。本文であるミシュナ（Mishnah）、その注釈であるゲマラ（Gemara）の二部から成り、広くユダヤ民族の社会生活を物語る。エルサレム（またはパレスチナ）・タルムード（四世紀末）とバビロニア・タルムード（五世紀末）とがある。

もし人間が罪を犯したというなら、家畜はどんな罪を犯したのか。ラビ・ヨシュア・ベン・カルハは言う。ある人が息子のために結婚式を準備をした。ところが息子は結婚式を目前に突然死んでしまった。父は結婚式を取りやめて言った、「すべては息子のためにしたことだ。息子が死んでしまった今、結婚式をする意味がない」。同様に神は言った、「私は、家畜も獣も人間のために創造したのだ。人間が罪を犯した今、これらにどんな意味があるというのだ」。

（『バビロニア・タルムード』、サンヘドリン篇一〇八a）

動物には罪がないであろうという発想、あるいは植物に何の罪があるのかという発想を私たちは持ちますが、ユダヤ的発想ではすべては人間のために創造したのだと考えます。天地創造にあるように、人間の創造は一番最後です。そして七日目に神様が休んだということがあって七日目に天地創造が完成したとあります。

私たちは常識で聖書を読んでしまうので、六日目に天地創造が完成して、七日目に神様は休んだと単純に理解してしまいがちです。

ですが、厳密に読んでみると、七日目に神様が休んで完成したとあります。

ということは、天地創造の目的は何なのかというと、人間の創造で終わっていないということです。

「神の休み」ということが、天地創造の目的でなくてはいけないということです。

どうやったら、神様が休んだような休みの中にわれわれ人間が入っていけるのだろうか。天地創造の最後が神様の休んだことだと理解するならば、なお、われわれの残されている目標は、神の休みというその休みの世界に、われわれはどうして入っていったら良いのかということを問うていくこと。これがほとんどの宗教が、結局は目指しているもののはずです。

ですから、新約聖書の時代のユダヤ人にも確実にありました。確実にあった。「神の休みに入れ」という言葉が新約聖書に登場してくるのは、この背景によるものです。

つまり天地創造は神が休んだということで完成した、とおそらく理解していたのです。そうなっていくと、六日目に人間が造られ、それ以前に動物、植物、無機物が造られていったという現実がありますが、すべては人間のためであり、さらにその先の神の休みのためであるとなっていきます。

ですから、人間が罪を犯してすべてを台なしにしてしまった以上、すべてに存在理由はないとユダヤ解釈は結論づけるのです。

もう一つ考えなくてはいけません。果たして神が人間を滅ぼしてしまうような状況とは、一体何なのか？

そこまで神が最終決断を下すほどの罪とは一体何か？

（三）神の前の腐敗

「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった」（創世記六章五節）

「地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた」（創世記六章十一節）

という二つに注目して下さい。

何故に、五節で言った内容を、十一節でまた似たようなことを繰り返す必要が何故あるのか？

ユダヤ注解は絶対にここを見逃しません。

さらに同じようなことが繰り返されていたときに、何か前になかったことが付け足されていないかを見ていきます。何が付け足されているか？

「神の前に」という言葉が五節にはなく、十一節で付け加わっています。「神の前に堕落した」「神の前に暴虐で満ちていた」ということは、一体、何を言おうとしているのかということにユダヤ注解は注目しました。何人かのユダヤ注解を紹介します。

第一に

アブラハム・イブン・エズラ（一〇八九～一一六四年）の注解

「神の前に」―公然と行っていたという意味である。また次のように注解する者もある。彼らの腐敗は人々に隠されていたが、神には明白であった。私の考えに最も近い解釈はこうである。トーラーは人々が悟ることができるように擬人的な表現を使っているのである。あたかも主人の前で罪を犯しても、主人を恐れない奴隷のような状態にあった、と述べているのである。

何を言いたいのか。

当時、二種類の解釈があったということが分かります。

人々の目には隠されていたのだが、神の目には「罪」と映っていたという解釈をする人たち。

そうではなく、神の前でも恐れることなく公然と、堂々と人の前も神の前も関係なく行っていたという解釈。

この二つの解釈です。アブラハム・イブン・エズラがどちらを採ったか？

「あたかも主人の前で罪を犯しても、主人を恐れない奴隷のような状態にあった、と述べているのである」と言う。つまり、

神が目の前にいることが分かっているにも拘わらず、堂々と悪を行っている、そういう状況だったのだと言います。

もう少し後代の注解者を見てみます。

シュムエル・ダヴィッド・ルツァート（一八〇〇～一八六五年）の注解

「神の前に」―神の考えではという意味である。暴虐のゆえにこの社会は存続できなくなったことを神は知っていた。ところが暴虐を行っていた人々は、このことを悟っていなかった。そこで、「すべての肉なるものの終わりが私の前に来た（十三節）」と書かれているのである。

つまり、当時の人たちは、これはとんでもないことだということに全く気づいていなかったけれども神様の前にはもう我慢できない状況だった、という意味であると解釈する。

ユダヤ注解が何に注目したかというと、先ず第一に「地が滅ぼされ、人類が滅ぼされる」に至る悪とは何かと考えるとき、「神の前」における悪という観点抜きではあり得ないということです。

これが一つのポイントです。

人と人に対する悪も勿論あるでしょうが、それ以上に、神様をも恐れぬような悪だったのだ、だから神はそこまで決断したのだ、と。ただ人間が悪いことをしているだけでは、神はそこまでの決断は下さないはずだ。そう見ていたということです。

そしてよく見ると「堕落」という言葉と「暴虐」という言葉の二種類が出てきます。

果たして「堕落」と「暴虐」何が違うのか？

何を「堕落」と言い、何を「暴虐」と言うのか？

どうしてこれに拘るのか。最終的に神が地を滅ぼすと決断したことについてもう一度見てみます。

（四） 堕落と暴虐

「すべての肉なるものの終わりが、私の前に来ている。

地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。

それで今私は、彼らを地とともに滅ぼそうとしている」（創世記六章十三節）

神が滅ぼすことを決心したときには、「暴虐」が原因だと語られていて「堕落」がその原因だとは語られていません。

「堕落」はない方がいいし、困ったことなのですが、最終決断の理由は「暴虐」であって、「堕落」ではない。

ユダヤ注解はどう見ているか？

ユダヤ注解では「不義」「罪」「悪」というものがたくさんあり、どれも褒められたことではないが、一番罪が重いのは「略奪」だと理解しています。

この「略奪」というのが、先ほどの「暴虐」ということです。

つまりユダヤ的理解では「暴虐」＝「略奪」と理解しています。

では、「堕落」は何かというと、「性道徳の堕落」と「偶像礼拝」です。

「堕落」＝「性道徳の堕落」「偶像礼拝」と理解しています。

次に

『バビロニア・タルムード』、サンヘドリン篇一〇八a[五]

ラビ・ヨハナンは言う。略奪の力がいかに大きなものであるか、来たりて見よ。洪水の世代の人々はあらゆる罪を犯した。しかし、彼らの手が「略奪」を始めるまでは断罪されていない。

洪水を起こして人々を全滅させるに至る最大の原因は、「略奪」です。

どんな略奪をしていたのか？

ラビ・オヴァディア・スフォルノ（一四六八～一五五〇年）の注解

「地は暴虐で満ちていた」、すべての人々がお互いに略奪をしていた。地主は小作人から強引に奪い取り、小作人は偽って地主から奪い取る。この地はその実を強盗に与えているようなものである。

無秩序状態になっていたということです。隙（すき）さえあれば人からものを略奪するという状態になっていたのだと理解しています。

五 タルムードは表裏に書かれていて、それぞれをページa，bという。

（五） より重い罪はどちらか？

罪には二種類あります。「神に対する罪」と「人に対する罪」です。どちらの罪がより重いのか？

「神に対する罪」が重そうに思われますが、「神に対する罪」は贖罪日において悔い改めてお祈りすると赦されるとされています。

しかし、「人に対する罪」は赦されないとしています。「人に対する罪」は先ず、その人の所に行ってその人と和解してきなさい、それからだと言っています。

「人に対する罪」も贖罪日において悔い改めてお祈りすると帳消しになるかというと、実はそうではないのです。

また聖書を読むと[六]「ヨベルの年[七]」といって、五十年に一回すべての負債、すべての罪が帳消しになる年があると書かれています。ですが、ヨベルの年は歴史上未だに実行されたことがありません。実行しようものなら経済の破綻等々、大変なことになります。理想として書いてあると言えます。

（六） 肉食と菜食

「ノアの箱舟」物語を読むときに、私たちが絶対に理解しておかないといけないことがあります。

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」。神は仰せられた。「見よ。わたしは、全地の上にあって、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。それがあなたがたの食物となる。また、地のすべての獣、空のすべての鳥、地をはうすべてのもので、いのちの息のあるもののために、食物として、すべての緑の草を与える」。そのようになった。（創世記一章二十八～三十節）

この天地創造の一章の中で何が言われているかというと、すべての生き物は「菜食」つまり、草、木、実そういうものを食べろと言われていて、肉は食べてはいけなかったのです。

六 レビ記二十五章

七 The Jubilee year

「種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木をあなたがたに与える。」とあります。野菜・果物が基本的に生きていくために食料だったのです。

ところが、創世記九章。

それで、神はノアと、その息子たちを祝福して、彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。野の獣、空の鳥、―地の上を動くすべてのもの―それに海の魚、これらすべてはあなたがたを恐れておののこう。私はこれらをあなたがたにゆだねている。生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべてのものをあなたがたに与えた。（創世記九章一～四節）

ここで初めて肉を食べることが許されたのです。ということは、洪水と箱舟以前は菜食だったのです。

そして、この全ての人が滅ぼされて、ノアとその家族だけが生き残ったその後で、やっと肉を食べることが許されたということは、ある意味で神の妥協だったのです。

何故か？　それをうかがわせる文章が次に来ます。

しかし、肉は、そのいのちである血のあるままで食べてはならない。私はあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。私はどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。（創世記九章四～五節）

肉は食べていいと言いながら、神様は条件をつけてきました。血があるままで食べてはいけないと言っています。

何故ならば血は命だからです。

聖書は旧約聖書、新約聖書を貫いて「血は命である」という発想に立っています。

農耕民族の日本人にはあまりない発想ですが、遊牧民族のこのヘブライ人は「血は命である」という発想のもとに立っているので、新約聖書もこの立場で読んでいかないと話が通りません。

ここで初めて、緑の草と同じように、野の獣、空の鳥、海の魚等これらを食べてもよろしいということになって、生きて動いているものは皆、食べてもいいということになった。

これに関して、ラビ・モルデハイ・ハコーヘンの注釈を紹介します。

ラビ・モルデハイ・ハコーヘン、『アル・ハトーラー』[八]、三十八頁

「生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である」。この句の直後に「私はあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の価を要求する。私はどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する」という言葉がある。どうして、肉食と流血の問題が隣り合わせになっているのだろうか。このように説明する人たちがいる。肉食は、人間の中に激怒して殺害するという性質を芽生えさせてしまう。したがって、トーラーは肉食を許可した直後に、殺人への警告を述べているのである。

肉ばかり食べると、野菜ばかり食べている人と比較して粗い気性の人間が育つという考えです。肉食のためには、動物を殺さないとそれを食べることが出来ない。つまり血を流さないと肉は食べることが出来ない。そういうことをし、そういうものを食べ、そういう生活をするということ「血を流す」ということに対する感覚が鈍ってくる。人間の性質として、激しい危険な性質がどうしても芽生えがちである。だから神は、肉食は許したが血のままで食べるな、と付け足したのであるというユダヤ解釈をしました。

動物を殺して食べるということは、人間に残忍性を植え付けるのではないかという発想を、ユダヤ理解は持っていたということです。だから生きたままの肉を食べることを禁止したのです。

必ず「血抜き」をして食べるということを条件として加えた。そして「血は命である」から血のままで食べてはいけないとしました。

ユダヤ地方あるいはイスラエルに旅行したことがある人は、レストランで肉を食べるとパサパサしていることを体験します。屠殺の時点で血を抜いているだけではなくて、丁寧にも塩に漬けて、その後さらに水で洗って全く血を抜いてしまった肉を調理するわけですから、日本で食べるようなわけにはいきません。

「美味しくない」と言えば確かにその通りなのですが、それくらい「血を抜く」ということをしています。それはこれらの発想によるものです。

八 イスラエルの多くのラビたちの種本

（七） 虹の契約

ノアの箱舟の物語を読むと最後に「虹の契約」というのが出てきます。第九章です。

「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。
あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。
わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがことごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない。」
（新共同訳聖書）

すべての肉は洪水によって滅ぼされるということはもうない、という「契約」を結んだということが書いてあります。

「洪水物語」というのは、ただ単に人間が悪を行った、略奪を行ったので罰としてそれを滅ぼしたという理解では不十分なのです。

洪水の水が退いて、ノアとその家族が箱舟から出てきたとき、神は何をしたか？「契約」を結んだと書いてあります。これを通過して、神と人間は契約状態になったと聖書は述べています。

これは今までになかったことです。洪水前は神と人間は契約状態ではありません。これは初めてのことです。

しかもその契約は「虹の契約」だというのです。

虹を弓にたとえたら、矢をつがえて放つと矢は地上には戻りません。「虹の契約」というのは神様は、もう弓を地上に向けて放つことはないということです。そして箱舟を通過して、神と人間は「契約」という状態になっていったのです。

ただ単に好き放題に生きていた洪水の前とは違う人類になっていった、という発想、理解をしています。

そしてこのノアの物語が終わると、次に聖書に何が書いてあるかというと、実は系図が書かれています。

次々と系図が書かれています。旧約聖書学という学問の世界では、いろいろな史料があって、そしてこの物語の切れ目に編集

虹の契約　Joseph Anton Koch

という形で入れ込んだと言われます。なるほど編集段階ではそうだったのかも知れませんが、ユダヤ理解ではこれをどう考えるか。

今までの「個人」という段階から、この洪水を経て「集団」「民族」という段階に人間は移行していったのだと理解します。つまり、「契約」というものを結び、ノアとその家族という一個人から、系図が書かれているという事実から「民族」「言語」というグループに突入して行った。

実際、聖書を読んでみると、「民族」対「民族」の話が出てくるようになりますが、系図は「個」から「民族」への発展を意味しているのではないかとユダヤ理解では説明しています。

おわりに

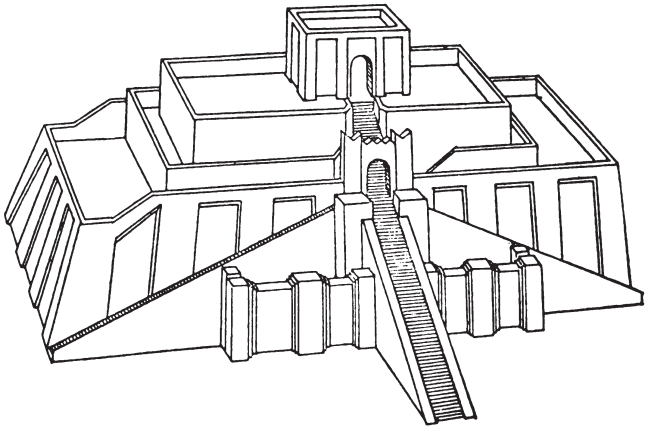
「ノアの洪水」物語について少し詳しく述べてみました。この物語の次に続くのが「バベルの塔」の物語です。「バベル」というのは元々のヘブライ語ではなくバビロニア語の「bāb ili」バブ・イリから来ているようだと言われています。バブというのは「門」、イリは「神」の意味です。

つまり、「バベル」というのはバビロニア語で「神の門」という意味であったらしい。それをヘブライ語で「バベル」という字を当てると、「混乱」という違う意味が生じてきます。

そこで「バベルの塔」の物語というのは、彼ら（バビロニア人）が「神の門」と言っていることに対して、「全然そうではない」「混乱の始まりだ」と嘲笑している文学だということになります。

ノアの箱舟物語では、なぜ神は人々を洪水によって滅ぼしたかの理由が書かれていますが、バベルの塔を建てたとき、何故神様によってストップさせられたのか、納得のいく説明が聖書の中にはありません。

「ノアの洪水」とそれに続く「バベルの塔」の物語は、同列には扱うことは出来ません。前者は神自ら絶滅させようとした物語で、後者は人々を「散らした」だけで滅ぼそうとはしていません。罰し方、程度がまったく違います。



ジグラート復元図

「バベルの塔」の物語を、ブリューゲルの絵画から（キリスト教的に）解釈しようとしても中野孝次が言ったように、何が何だか分からないと思います。何故なら、この物語はノアの物語同様、元来キリスト教のための物語ではないからです。

ブリューゲルの絵画を思い出すのではなく、むしろ考古学者アンドレ・パロによるジグラート復元図の方が参考になると思われます。

「創世記」第十一章

世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた。

東の方から移動してきた人々は、シンアルの地に平野を見つけ、そこに住み着いた。

彼らは、「れんがを作り、それをよく焼こう」と話し合った。石の代わりにれんがを、しっくいの代わりにアスファルトを用いた。

彼らは、「さあ、天まで届く塔のある町を建て、有名になろう。そして、全地に散らされることのないようにしよう」と言った。

ここまでにすでにいくつかの問題があるとユダヤ賢者は考えます。

ここでは一つだけ述べておきます。

「シンアルの地」とは一つの説ではチグリス川とユーフラテス川の間の平地だと言われています。とすると川と川の間です。前述のように、メソポタミアは「泥の文化」であると三笠宮崇仁親王は書いていますが、粘土質の土を持ってきて、一つの型にはめて、れんがを作ってそれを焼いて、それに漆喰を塗ったか、あるいはアスファルトを塗ったかして、雨や風によってそう簡単に崩れないものを作ろうとしたと考えられます。アスファルトを使う技術まで出来てきたのです。

当時としての石で家を建てるという普通の方法ではなく、粘土やそれに似たものをこねて、それを干して更に火で焼いて堅くしてそれを使って建築物を建てていくということは、技術革新だったはずです。

大きな技術革新がここで起きたと見ていきます。

しかし、神はかつてこう言っています。

神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」。（創世記一章二十八節）

つまり、地に満ちていくというのが、人間が創造されたときの神の命令だったと書いてあります。

そうすると、われわれが全地に散らされることのないようにしよう、と彼らが言ったということは、神様の命令に反対の動きだったということになります。

次回、この続きを述べようと思います。

そして、「バベルの塔」に続くのが「アブラハム伝」です。「アブラハム伝」は**「バベルの塔」の物語に対するアンチテーゼ**です。聖書学者が言う（「創世記」の）第一章から十一章までは並べ方があまり上手ではなく、雑に作っていて、十二章の「アブラハム伝」から少しわかりやすい話になってくるという説明の仕方と、ユダヤ人の見ている見方と違うということが見えてきます。そして「技術革新」とは何なのかということをこれに絡ませて、ユダヤ人は理解しようとしてきたということです。

これらのことを次号で論じることが出来るように、学生生活を送れればと思っています。

主な参考文献

（一）『新共同訳聖書』（日本聖書協会）
（二）『聖書の起源』（山形孝夫　二〇一〇年　ちくま学芸文庫）
（三）『シュメル神話の世界』（岡田明子・小林登志子　二〇一四年　中公新書）
（四）『聖書の考古学』（アンドレ・パロ　一九七六年　みすず書房）
（五）『聖書を読みとく』（石田友雄　二〇〇四年　草思社）
（六）『古代オリエントと私』（三笠宮崇仁　一九八四年　学生社）
（七）『古代オリエント都市の旅』（小林登志子　二〇〇九年　ＮＨＫ出版）